

「教職に関する科目」の授業と、教育学研究の両立方策を探る

——授業シラバスの分析と作成を通じて——

山口 裕毅 (広島大学大学院・院生)

尾場 友和 (広島大学大学院・院生)

黒木 貴人 (広島大学大学院・院生)

はじめに

本研究は、授業シラバスの分析と作成を通じ「教職に関する科目」の授業と、教育学研究の両立方策を探ることを目的としている。これは、中国四国教育学会第63回大会において行われたラウンドテーブル「これからの大学教員養成の話をしよう」の企画趣旨における議題（『研究』と『教育』は分かちがたく結びついているのではないか」等）について、広島大学大学院教育学研究科博士課程後期に在学する大学院生である論者ら（以下、D1）による応答である。具体的には、「大学教師が『教職に関する科目』の授業を担当する意義を考える」（以下、「大学教師による授業の意義」）ことによって、アプローチすることを試みる。ここでは、次のようなスタンスが前提に据えられている。すなわち、「『授業は授業』と『教職に関する科目』で要求される授業力を構想しつつも、時に、大学教師自身の教育学研究における内容上のエッセンスや、教育学研究におけるそれぞれの領域に特有な、批判的なものの見方や考え方を、授業の中で活かしていく」（以下、「『教職に関する科目』の授業と研究との両立」）というスタンスである。考察の対象は、大学教師の在り方と「教職に関する科目」の授業との関係とし、焦点を絞った。

研究の手順について、上記の問題設定とD1開講の授業構成とを関連させながら述べる。D1の三人は、「教員養成学講究」（以下、「講究」）の授業や「講究」の授業以外のミーティングを通じ、上に記した「大学教師による授業の意義」を考えるようになった⁽¹⁾。そしてその結果、「『教職に関する科目』の授業と研究との両立」という見解に到達した。より具体的には、「講究」の授業における講義の概要（第一節第一項）、シラバス分析（第一節第二項）、シラバス作成（第二節）である。

1. 「大学教師による授業の意義」を考える

まず、「大学教師が『教職に関する科目』の授業を担当する意義」を考えたい。

1) 「講究」の概要

(1) 本年度の授業概要

「講究」の授業概要は次のとおりである。

「教員養成学講究」においては、博士課程前期までに習得した教職に関する学習をベースに、院生は、国内外の教員養成の制度と教員養成プログラムを学習し、我が国の主要な大学教育学部の教員養成カリキュラムと、授業のシラバス、使用教科書を分析し、比較考察する。さらに希望する授業科目について、15回のシラバスを作成する。

(「教員養成学講究」のシラバス)

(2) 授業スケジュール

次に、行われた授業の概要を記す。

表 1. 「教員養成学講究」の授業概要

	内 容
1	イントロダクション
2	日本の教員養成（1）：戦前の教員養成制度
3	日本の教員養成（2）：戦後の教員養成制度（1）
4	日本の教員養成（3）：戦後の教員養成制度（2）
5	日本の教員養成（4）：教職大学院制度
6	日本の教員養成（5）：教職大学院のカリキュラム
7	諸外国の教員養成：アメリカの大学における教員養成
8	日本の教員養成の在り方に関する討議
9	ポートフォリオ説明会
10	課題研究の打ち合わせ（シラバス分析と作成）
11	院生の発表（1）シラバス分析「教育と社会、制度・経営」（尾場、黒木）
12	院生の発表（2）シラバス分析「教育の理念、歴史、思想」（山口） 「特別活動の指導法」（尾場）
13	院生の発表（3）シラバス分析「教育課程」（黒木） 「道徳の指導法」（山口）
14	院生の発表（4）シラバス作成「特別活動の指導法」（尾場） 「道徳の指導法」（山口）
15	院生の発表（5）シラバス作成「教育と社会、制度・経営」（黒木）

*なお、表中シラバス分析とシラバス作成における、科目名の後の（）内は発表者を表す。

前半の講義においては、シラバスの分析や、シラバスの作成を行う際の視点が養われた。

2) 授業シラバスの分析

(1) シラバス分析の概要

D1の三人が行った、シラバス分析の一覧は次の通りである。それぞれのシラバス分析においては、国立教員養成系学部、国立一般学部、公立大学、私立大学等、3校から4校のシラバスが扱われた。

表 2. シラバス分析対象科目名

発表者 (研究室)	シラバス分析 1 科目名	シラバス分析 2 科目名
山口 (教育哲学)	「教育の理念、歴史、思想」	「道徳教育の指導法」
尾場 (教育社会学)	「教育と社会、制度・経営」	「特別活動の指導法」
黒木 (教育行財政学)	「教育と社会、制度・経営」	「教育課程」

(2) シラバス分析の例

シラバス分析のうちでも、尾場が特徴的な考察を行ったので取り上げたい(資料1、資料2)⁽²⁾。資料1は、「特別活動の指導法」のあるシラバスである。このシラバスの授業計画においては、森有礼が主として扱われている。森有礼は、初代文部大臣として、師範学校令、帝国大学令、中学校令、小学校令等にかかわるなど、近代日本の教育制度の確立者として教育学における重要人物の一人に位置づけられる⁽³⁾。しかし、このシラバスにおいては、森有礼を「特別活動の指導法」の授業においてどのように扱うのが必ずしも示されていない。「特別活動の指導法」のシラバスとしては疑問が残る。

また、資料2は「特別活動の指導法」の別のシラバスである。このシラバスからは、現場の知が活かされた授業が展開されることがうかがえる。その一方で、シラバスの授業計画においては、学習指導要領に示される、特別活動で扱われるべき諸領域⁽⁴⁾の扱いが少ないように思われる[相原・新富・南本編著 2010、文部科学省 2008a; 2008b; 2009]。

論点を整理したい。資料1では、授業内容が大学教師自身の学術研究上の専門分野に限定されすぎている印象をぬぐうことが難しい。授業を受ける学生にとって、学ぶ内容があまりに一部の領域に限定されてしまうのではなかろうか。その一方で、資料2では、学習指導要領に示される特別活動の諸領域の扱いが少ないように思われる。

もちろん、現場の知が「教職に関する科目」の授業で扱われること自体は、学ぶ学生にとって意義のあることであろう。しかし、授業が「特別活動の指導法」として開講されている以上、特別活動の諸領域の学習が十全に保障される必要もあるのではなかろうか。

「教職に関する科目」の授業を行う大学教師には、この二つの論点をうけた上でバランスをとりながら、授業を構想し、シラバスを作成することが求められよう⁽⁵⁾。これは、養成段階にあるD1にとっても達成すべき課題であると考えられる。

2. 『教職に関する科目』の授業と研究との両立の可能性を探る

次に、上記の「大学教師による授業の意義」を念頭に置きつつも、シラバスの作成を通じて、『教職に関する科目』の授業と研究との両立の可能性を探りたい。

1) 授業シラバスの作成

次表は、D1の三人が行ったシラバス作成科目名とその特徴である。

資料1 シラバス分析1 「特別活動の指導法」

授業科目名	「特別活動の指導法」 2単位 講義形式
概要	森有礼に関する研究論文(英文)を読んでいます。担当箇所の発表に加え、グループワークなども採り入れます。受講生のみなさんの積極的な参加を期待しています。
到達目標	英文をていねいに読み解いていく力を少しずつ高めていくこととともに、近代日本の教育についての基本的な理解を深めていくことを目標とします。
授業計画	1. オリエンテーション 9. 森有礼に関する研究(英文)を読む(6) 2. 森有礼の思想とその歴史的背景(1) 10. 森有礼に関する研究(英文)を読む(7) 3. 森有礼の思想とその歴史的背景(2) 11. 森有礼に関する研究(英文)を読む(8) 4. 森有礼に関する研究(英文)を読む(1) 12. 森有礼に関する研究(英文)を読む(9) 5. 森有礼に関する研究(英文)を読む(2) 13. 森有礼に関する研究(英文)を読む(10) 6. 森有礼に関する研究(英文)を読む(3) 14. 森有礼に関する研究(英文)を読む(11) 7. 森有礼に関する研究(英文)を読む(4) 15. 授業のまとめ 8. 森有礼に関する研究(英文)を読む(5)
成績評価基準	平常点 80% 発表、グループ作業の成果。 小レポート 20%
テキスト	授業時にテキストとして用いるプリントを配布します。
参考文献	授業時に参考資料として用いるプリントを配布します。
備考	授業の目標とねらい:すでに習得された英語力をもとに、教育学とその周辺の専門用語を学び、英語の資料を多読する。 授業で用いる教授言語:日本語のみで授業をおこなう。

資料2 シラバス分析2 「特別活動の指導法」

授業科目名	「特別活動の指導法」 2単位
概要	特別活動のあり方について、現場の教師だった教育実践例を土台とした講義を行う。講義も行うが、グループ討論、ワーク、当事者の方のお話を聴く等、参加型の授業を行う。
到達目標	「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸張を図り、集団や社会の一員としてよりよい生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己を生かす能力を養う。」は学習指導要領特別活動の目標である。
授業計画	1. オリエンテーション 9. セクシャルマイノリティー1 2. コミュニケーションスキル1 10. セクシャルマイノリティー2 3. コミュニケーションスキル2 11. 若者とジェンダーについて 4. HRの集団作りの実践報告 12. 暴力と支配の構造 5. A高校定時制にみる特別活動1 13. 学校外の教育関係者との連携 6. A高校定時制にみる特別活動2 14. 生き抜く力をつける集団とは 7. 課題図書を読んで 15. まとめ 8. HRの中の性教育実践報告
成績評価基準	授業への積極的な貢献度(出席状況、意見交換時の発言状況)毎回の授業後のミニ感想文、課題図書感想文、レポートによって成績を評価する。
テキスト等	特には使用しません。その都度プリントを配布します。
備考	講義は高校教育が中心ですが、講義の中で中学校教育のことは多少補足します。

表3. シラバス作成対象科目名とそれぞれのシラバスの特徴

発表者	発表科目名	観点
山口 裕毅	「道德教育の指導法」	内容のレクチャー、学生による模擬授業、ケースメソッド
尾場 友和	「特別活動の指導法」	内容のレクチャー、学生による指導計画作成・発表
黒木 貴人	「教育と社会、制度・経営」	当該領域の体系的レクチャー、視聴覚教材

2) シラバス作成例

作成されたシラバスのうちで、山口による「道德教育の指導法」のシラバスを取り上げたい(資料3)。このシラバスは、教科書(林忠幸・堺正之編著『道德教育の新しい展開』東信堂、2009年)に基づきつつ、前半は内容のレクチャーによって構成され、後半は、授業者および学生による模擬授業によって構成されている。ややチャレンジングな構成となっている。

3) 両立のための一方策の提案

ここで、『教職に関する科目』の授業と研究との両立の可能性を探るため、ある方策を提案したい。それは、授業のための教材研究と、大学教師自身の教育学研究それぞれの内容を拡大することで、接近させ、やがては接合するという試みである。

まず授業の内容であるが、たとえば、シラバスの第5回目にレクチャー1-4として、道德的価値が扱われる(目標は、「道德教育の基礎理論についての知識を有している」)。これは教科書の当該章(上地完治「道德的価値のとらえ方と道德教育」)に拠るものである。ここで、当該章の要約を試みるとするならば、次のようになろう。すなわち、道德教育においては様々な道德的価値が扱われる。これら道德的価値は、普遍性を有するのか、それとも特定の共同体に埋め込まれているとするのかで立場が大きく分かれる。学習者は、両者の狭間で、道德的価値の自明性の問い直しを迫られる。

次に授業の方法であるが、学習者が教科書の内容をより効果的に学ぶために、教育学の領域において近年注目されているケースメソッド教授法を提案したい[安藤2009、丸山2006、岡田・竹鼻2011、大脇2011a; 2011b; 2011c、佐野2011、Strike & Soltis 2009、

資料3 シラバス作成「道德教育の指導法」

科目名	道德教育の指導法	単位数	2	対象学年	2年もしくは3年	対象学生	約80人
授業目標	道德教育を支える基礎理論を学び、学校における道德教育の目標と内容、児童(生徒)の道德性を育成するための指導計画、道德の時間の指導方法について理解を深める。具体的な目標は以下の通りである。 (1) 道德教育の基礎理論についての知識を有している。 (2) 小学校(中学校・高等学校)の教育課程における道德の位置づけと道德教育の目標・内容を理解している。 (3) 道德教育の計画の意義を理解し、これを説明することができる。 (4) 道德の時間の指導過程や指導方法に関する基本的事項を理解し、学習指導案の作成に生かすことができる。 (5) 将来、担任教師として学級における道德教育に取り組む意欲を高め、具体的なプランを構想し実践することができる。 (6) 授業観察における観察録を記し、批評会において意見交換を行い、自身の実践に活かすことができる。						
授業内容	1. オリエンテーション 道德教育の現在の動向 9. 事例研究2-2 「差別をなくす」 2. レクチャー1-1 道德教育の現在の歴史 10. 事例研究2-3 授業研究1(山口) 3. レクチャー1-2 道德性の発達理論 11. 事例研究2-4 授業研究2(現職教員) 4. レクチャー1-3 社会化論と道德教育 12. 模擬研究授業1 模擬授業(2つ)&研究討議 5. レクチャー1-4 道德的価値 13. 模擬研究授業2 模擬授業(2つ)&研究討議 6. レクチャー2-1 道德教育の構想と指導計画 14. 討議 道德教育と教師の倫理 7. レクチャー2-2 教材研究と指導案の作成 15. まとめの討議 8. 事例研究2-1 「生命の大切さを教える」						
テキスト	林忠幸・堺正之(編著)『道德教育の新しい展開』東信堂、2009年。 文部科学省『小学校学習指導要領解説 道德編』東洋館出版社、2008年。 文部科学省『中学校学習指導要領解説 道德編』日本文教出版、2008年。						
参考文献	品川利枝『中学校・道德授業の新機軸』東信堂、2002年。						
評価方法	授業参加30点(上限) 小テスト20点、レポート(指導案)25点 模擬授業・授業観察と批評会の記録25点 *1 授業参加は一授業につき2点、発言を2点とする。*2 レポート(指導案)は9回目の授業時に提出。 *3 模擬授業実践者は25点 授業観察者は2回の授業観察と批評会記録で25点						
授業外の学習等	本授業は教員による講義だけでなく、学生の皆さんの授業中の発言、学生の考案した学習指導案、学生による模擬授業、模擬授業についての研究討議等により成り立ちます。学生のみ皆さんの積極的な授業参加を歓迎します。						

竹内 2011a; 2011b]。ケースメソッド教授法は、ケースに書かれている内容を討議する形で進められる授業方法である。ケースには、現実に生じうる問題が埋め込まれており、授業を受ける学生は、そのような問題をいわば予行演習するとともに、他の学生の声に耳を傾けることで、自身が気づかなかった点を学ぶことができる。

ケースメソッド教授法を行う授業者は、最新かつ豊饒な知識を有していることが求められる。なぜならば、授業者にそのような準備がない場合、ケースメソッド教授法において必須となる臨機応変な対応、すなわち、学生の予期せぬ回答を板書の中に位置づけつつ、次の回答を引き出す問いを発すること等が、困難になることが予想されるからである。

この、ケースメソッド教授法を行う授業者に求められる資質能力に、『教職に関する科目』の授業と研究との両立の可能性を探ることができるのではないかと提案したい。授業者に、最新かつ豊饒な知識が備わっていることが授業の成立条件であるとするならば、教材研究の段階で授業者には、最新研究を涉猟することが求められるからである。この過程は、教育学に関する研究のレジュメや論文を執筆する下準備としての先行研究のレビュー作業と重なりえよう。ここに、授業のための教材研究と、研究者自身の教育学研究との接合点をみたい。

おわりに

第一節の『大学教師による授業の意義』を考える』では、シラバス作成にあたって、二つの論点が提起された。すなわち、授業内容が大学教師の専門領域に特化しすぎることと、当該授業で扱われることが求められる内容の比重が小さいということである。どちらの問題が生じて、「大学教師による授業の意義」、それも学生にとっての「授業の意義」を見出すことは難しかろう。

次に、第二節の『教職に関する科目』の授業と研究との両立』では、ケースメソッド教授法による授業が、教師に入念な教材研究を要請することから、これを教育学研究の下準備とすることで、授業と研究とを両立する可能性が探られた。

以上の二節を通じて、「大学教師による授業の意義」が『教職に関する科目』の授業と研究との両立』のうちに探られた。しかしこれは容易ならざる課題である。たとえ、教材研究と教育学研究の準備とが合致するとしても、大学教師が第一節で提起された二つの論点についてバランスを欠いてしまうとすれば、「授業の意義」は容易に失われてしまうと考えられるからである。養成段階にある D1 の三人は、新たな可能性を模索しつつ、なおも努力を継続する必要があるだろう。

註.

- (1) なお、教職課程担当教員養成プログラム関連の講究には、D1 前期開講の「教員養成学講究」と D1 後期開講の「大学教授学講究」がある。本研究は、前者「教員養成学講究」に焦点を絞ることとし、後者「大学教授学講究」は扱わない。
- (2) なお、参考資料 1 および 2 においては、授業者名を匿名としたうえ、授業名は「特別活動の指導法」に統一した。また、本分析は、あくまでシラバスを対象としたものである。実際の授業が行われる様子について分析することはできなかった。
- (3) 森による近代日本の教育への影響はこれに限られない。たとえば、森が学問と国民教育を区別したことで、学問の成果が直接的に国民教育へ反映されることが妨げられることになったこと、森の師範教育重視の姿勢が師範タイプを生み出したこと等が指摘される [影山 2000]。しかし本研究は、「特別活動の指導法」のシラバス分析の一環で森に言及しているにすぎない。したがって、森の表象の仕方については深入りせず、簡潔な言及をすることに努めた。
- (4) すなわち、特別活動において扱われるべきとされる四ないし三領域のことである（小学校は、学級活動、児童会活動、クラブ活動、学校行事の四領域。中学校は、学級活動、生徒会活動、学校行事の三領域。高等学校は、ホームルーム活動、生徒会活動、学校行事の三領域である）。
- (5) もちろん、「教職に関する科目」の授業シラバスについての論点はこの二つに限定されない。無数の論点が指摘されうるであろう。実際、「講究」の授業においては、合計で 42 のシラバスが扱われ、それぞれの良い点、悪い点が検討された。これらのシラバスすべてを類型化し問題点を指摘することは困難であった。したがって、本研究では、議論の展開と簡潔さを優先し、焦

点を絞った。

引用・参考文献

- 相原次男・新富康央・南本長穂編著、2010、『シリーズ現代の教職9 新しい時代の特別活動一個が生きる集団活動を創造するー』ミネルヴァ書房。
- 安藤輝次、2009、『学校ケースメソッドで参加・体験型の教員研修』図書文化社。
- 羽田貴史、2011、「大学教員の能力開発をめぐる課題」『名古屋高等教育研究』第11号、293-312頁。
- 飯吉弘子、2011、「学生のラーニングアウトカム向上のための教育実践と評価——多人数課題型学習効果の検証——」『名古屋高等教育研究』第11号、273-292頁。
- 影山礼子、2000、「森有礼」教育思想史学会編『教育思想史事典』勁草書房、677-679頁。
- 河合亨、2011、「学生の学習ダイナミクスの研究枠組み」『名古屋高等教育研究』第11号、95-114頁。
- 吉良直、2008、「アメリカの大学におけるTA養成制度と大学教員準備プログラムの現状と課題」『名古屋高等教育研究』8号、193-215頁。
- 松下晴彦、2010、「研究大学におけるEd. Dプログラムの意義——名古屋大学「教育マネジメント」の事例——」『名古屋高等教育研究』第10号、181-197頁。
- 丸山恭司、2006、「教師の倫理を考える」小笠原道雄・伴野昌弘・渡邊満編『教育的思考の作法——教職概論——』福村出版、162-172頁。
- 文部科学省、2008a、『小学校学習指導要領』東京書籍。
- 文部科学省、2008b、『中学校学習指導要領』東山書房。
- 文部科学省、2009、『高等学校学習指導要領』東山書房。
- 中井俊樹・中島英博・近田政博、2006、「名古屋大学の教育の質向上に有効な教員・学生・大学組織の実践手法——『優れた授業実践のための7つの原則』のチェックリストを用いた調査——」『名古屋高等教育研究』第6号、77-92頁。
- 中井俊樹、2006、「クラス規模は授業にどのような影響を与えるのか」『名古屋高等教育研究』第6号、5-19頁。
- 中井俊樹、2011、「学士課程の学生に研究体験は必要か——国際的動向と論点整理——」『名古屋高等教育研究』第11号、171-190頁。
- 西澤泰彦、2006、「多人数講義における問題点と教育方法」『名古屋高等教育研究』第6号、45-57頁。
- 岡田加奈子・竹鼻ゆかり編著、2011、『教師のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社。
- 大脇康弘、2011a、「ケースメソッドによるスクールリーダー育成」『月刊高校教育』2011年4月号、学事出版、66-71頁。
- 大脇康弘、2011b、「ケース教材：浜崎高校の学校改革」『月刊高校教育』2011年7月号、学事出版、72-77頁。
- 大脇康弘、2011c、「ケースメソッド授業の実践」『月刊高校教育』2011年8月号、学事出版、64-69頁。
- 佐野享子、2011、「ケースメソッド教育における授業設計」『月刊高校教育』2011年6月号、学事出版、68-73頁。
- Strike, K. A. & Soltis, J. F. 2009, *The Ethics of Teaching*, New York: Teachers College Press, 2009, pp. 82-106.
- 竹内伸一、2010、『ケースメソッド教授法入門——理論・技法・演習・ココロ——』慶應義塾大学出版会。
- 竹内伸一、2011a、「スクールリーダー育成とケースメソッド」『月刊高校教育』2011年5月号、学事出版、62-67頁。
- 竹内伸一、2011b、「もしスクールリーダーがビジネススクールで学んだら①」『月刊高校教育』2011年9月号、学事出版、64-69頁。
- 近田政博、2007、「研究大学の院生を対象とする大学教授法研修のあり方」『名古屋高等教育研究』第7号、147-167頁。
- 潮木守一、2008、『フンボルト理念の終焉？——現代大学の新たな次元——』東信堂。
- 潮木守一、2009、『職業としての大学教授』中央公論新社。
- 安原義仁・大塚豊・羽田貴史編著、2008、『大学と社会』放送大学教育振興会。

本論文は、中国四国教育学会『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第57巻に掲載されているものを転載したものである。